

東広島市志和町 報専坊の角筆文献

——二タイプの角筆文献からの考察——

柚 木 靖 史

はじめに

帝釈山天楽院報専坊は、東広島市の志和町にある浄土真宗本願寺派の古刹である。このお寺に、角筆文献発掘調査のため、初めて伺わせていただいたのは、平成十年六月二十六日ことであった。さっそく、御経蔵に収められた、貴重な古書を拝見し、角筆の書き入れの有無を全ての書に亘って調べさせていただいた。その結果、十一点、冊数にして計二十二冊の角筆文献を発見することが出来た。拙稿の筆者は、中国地方各地において、角筆文献の発掘調査を行っているが、東広島市からは初めての発見となった。その後、全ての角筆文献を対象に、解説作業を進めた。

本稿では、その作業結果から分かった、報専坊御所蔵の角筆文献における角筆の書き入れの特徴について述べることにする。その際、角筆の書き入れの内容により、角筆文

献を二つのタイプに分け、考察していくことにした。タイプの一は、本文の読みを中心に角筆が書き入れられているものであり、論語や孟子、古文真宝などといった漢籍の角筆文献に多く見られるタイプである。タイプの二は、本文の意味を中心に角筆が書き入れられているものであり、仏典の角筆文献に多く見られるタイプである。幸いにも、報専坊には、この二種類のタイプの角筆文献が存している。

この二つのタイプの角筆文献は、それぞれ、研究の目的も方法も自ずと異なるものと考えて、両者を区別して考察していくこととした。一のタイプの角筆文献は、主として、口頭語を探る上で大いに役立つものと考えられ、墨書にみられるような規範的な読み方と比較していくような方法が有効であろう。二のタイプの角筆文献は、主として、仏教の教義研究の跡をたどったり、本文解釈を行ったりすることに大いに役立つものと考えられ、他の仏教注釈書との関

わりを調べたり、あるいは同一の本文を有する他の角筆文献における角筆の書き入れと比較するといったような方法が有効であろう。

一、報専坊の角筆文献

報専坊の創建は、奈良時代の聖武天皇の御代で、来我という高僧が、帝釈山の麓に草庵を結び、帝釈天を尊信して一字を建立したのが始まりとされる。その後、生城山城主天野左右衛門尉豊常が、天下太平・武運長久のため帝釈天を尊信して堂宇を修築したという。以後数百年、天台宗の道場であったが、室町時代の明応五年（一四九六）に来恵が壮年の頃諸国巡拝の節、越前の国吉崎御坊へ参拝し、蓮如上人の他力念仏の説教を聴聞して深くこれに帰依して弟子となり、法名を淨教と改めて、真宗に改宗した。

寛延元年（一七四八）九月、暴風のため堂宇が破損したので、第十世住職釈春塘の時、久保田第十二世太郎右衛門が主宰して、寛延二年に再建した。その後、明治九年（一八七六）五月に、報専坊第十五世住職中山儀善が、三ツ城山西麓寺谷から、現在地（東広島市志和町奥屋）に移転して今日に至っている。⁽²⁾

経蔵に収められている文書の多くは、江戸時代以降、報

専坊の御住職が収集あるいは書写されてきたものや、信仰の厚い人々から寄贈されたものであることが、文献に書かれた代々の住職の御名あるいは報専坊の名、地名等によって知られる。

さて、今般の文献調査で発見した角筆文献の書名及び書誌的事項は、次のとおりである。

(1) 論語 一冊

江戸時代中期板 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き入れなし 縦25・0×横17・5

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

（表紙見返・墨書）寛延二己五月中春 淨念寺

（後表紙見返・墨書）智靜

(2) 孟子 一冊

江戸時代後期板 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き入れあり 縦27・5×横19・5

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(3) 正信念佛偈要解 一冊

江戸時代延宝九年（一六八一）板 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き入れあり 縦26・5×横19・0

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(4) 錦繡段 一冊

江戸時代寛文五年(一六六五)板 袋綴装 訓点附
刻あり 朱書書き入れあり 縦26・6×横18・8

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(刊記) 寛文五年乙巳六月吉日 開板

(5) 詩経正文 上 一冊

江戸時代寛文五年(一六六五)板 袋綴装 訓点附
刻あり 墨書・白書書き入れあり 縦25・5×横
18・3

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(表紙見返・墨書) 文政四年 己八月日 玄道

(6) 易経正文 下 一冊

江戸時代文化十一年(一八一四)板 袋綴装 訓点
附刻あり 墨書書き入れなし

訓点附刻あり 縦25・7×横18・1

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(後表紙見返・墨書) 初学聖子 冠色聖子

(刊記) 古義堂正本 文化甲戌年初夏 平安 文林

堂 発行

(7) 楞伽寶経註解 三冊

江戸時代正保五年(一六四八)板 袋綴装 訓点附

刻あり 墨書・朱書書き入れあり

縦26・7×横19・3

平成十年六月二十六日 柚木亜紀発見

(刊記) 正保五年 三月吉日

(8) 孟子集註 論語集解 中庸章句 大学章句 十冊

江戸初期 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き入れあ
り 縦25・8×横17・7

墨印「西原精太郎」あり 朱印「松島」あり

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(後表紙見返・墨書) 明治第五 壬申春求之 第五

大區十一小區 西原精太郎

号南 本地

(版心記) 山崎嘉点

(刊記) 村上勘右衛門 武村市兵衛 大阪 同姓佐

兵衛(孟子集註)

(9) 詩経 一冊

江戸時代中期板 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き
入れあり 縦25・0×横17・7

平成十年六月二十六日 柚木亜紀発見

孟子 道春点 一冊

(10)

江戸時代寛政元年(一七八九)板 袋綴装 訓点附

刻あり 墨書書き入れあり 縦26・0×横18・4

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(表紙見返・墨書) 坪井氏

(刊記) 文林堂藏 寛政元年¹ 六月大坂心齋橋通北

久太良町北² 入浪速書林 河内屋喜兵衛

(11) 孟子 一冊

江戸時代初期板 袋綴装 訓点附刻あり 墨書書き

入れあり 縦25・9×横18・3

平成十年六月二十六日 柚木靖史発見

(表紙見返・墨書) 上野屋 末次也 松太郎 賀茂

郡 志和町

以上十一一点、計二十二冊の文献が、今回の角筆文献発掘調査で見出された。いずれも、江戸時代に刷られたもので、(3) 正信念佛偈要解、(7) 楞伽寶経註解が仏教関係資料、他は漢籍である。仏教関係資料における角筆の書き入れは、主として字句の注釈を中心に記し、漢籍における角筆の書き入れは、主として字句の読みを記したものである。

さて、先の角筆文献の中には墨書によって、地名や人名、年紀などが書き入れられているものも存する。すなわち、(1) 論語の「寛延」(己)五月中春 淨念寺「智静」、(5)

詩経正文「文政四年 己八月日 玄道」、(8) 孟子集註「明治第五 壬申春求之 第五大區十一小區 西原精太郎 号南 本地」、(10) 孟子 道春点「坪井氏」、(11) 孟子「上野屋 末次也 松太郎 賀茂郡 志和町」などがそれである。このうち、寺名の「淨念寺」については、『広島県の地名』³⁾によれば、広島県内に限っても、呉市、山県郡(下筒賀村、下殿河内村)、三次市、福山市、三原市に同名の寺院名が記されており、ここでの淨念寺の所在を特定することができていない。「智静」「玄道」は、僧侶の名と思われるが、これについても未だ探し得ていない。「第五大區十一小區」には、現在の千代田町本地が含まれている。「西原精太郎」という人物については定かではない。「坪井氏」についても定かではない。

このように、墨書で記された地名、人物名については、分からない点も尚多く残っているが、(11) 孟子などは、墨書の「加茂郡 志和町」という記述から、志和町近郷に住んでいた人物の手にあつたものと考えてよからう。(11) 孟子の角筆文献には、巻末の墨書と同じ人物による墨書が、本文中に多数書き入れられている。それらの墨書の書き入れと、角筆の書き入れが交差した部分を見ると、墨が凹みに溜まったり、凹みによってかすれたりしていないことか

ら、墨書が先に、角筆がその後書き入れられたものと推される。角筆の書き入れが、墨書で「上野屋 末次 松太郎 賀茂郡志和町」と書き入れられた後のことであるとすると、角筆は、松太郎なる人物によって書き入れられたか、あるいは本書が報専坊に移された後に、このお寺に係る人物によって書き入れられたことになろう。ただし、角筆文献のなかには、墨書で「第五大区十一小区 本地」とある（8）孟子集註のように、東広島市志和町奥屋とは離れた地にあつたことを示す文献も存する。これなどは、角筆が山県郡本地で書き入れられたものなのか、報専坊に当書が移った後、志和町奥屋の地で書かれたものなのか、定かではない。

このように、報専坊の全ての角筆文献が、すぐさま志和町奥屋で書き入れられたものだということは断言できない。従って、報専坊の角筆文献に見られる全ての事象が、志和町奥屋における、近世の口頭語を示すかどうかという疑問も生じるが、安芸地方の他の箇所で見つかった角筆文献に見られる事象と比較することによって、その不確定な部分を補うことが出来るものと考えている。

二、読みの書き入れられた角筆文献

まず、本文の字句の読み中心に書き入れている角筆文献からみていく。以下、規範に合わないような書き入れを、文献ごとに示すことにする。

（一）論語

角筆の書き入れは少ない。全て、本文の字句の読みを書いたものとみられる。

（二）孟子（以下の用例の中で、鍵括弧に入れて示したものが、角筆によって書き入れられたものである。）

この資料には、角筆の書き入れが比較的多く付されている。これらの書き入れは、本文の字句の読みを書いたものである。音読されたものは、漢音で読まれている。

（開合の乱れ）

〈開音を合音に表記したもの〉

・耕稼陶_{トウ}（「トウ」）「卷第三 23丁表9行目」・羊（「ヨウ」）

「卷第四 7丁表10行目」・陶冶（「トウ」）「卷第五 13丁表3行目」・草木暢（「チヨウ」）「卷第五 14丁表9行目」

〈合音を開音に表記したもの〉

・洪水〔カウ〕〔巻第五 14丁表5行目〕

（参考）〈開合が正しいもの〉

・教ス〔カウ〕〔巻第三 17丁表6行目〕・耕稼陶〔カウ〕〔巻第三 23丁表9行目〕

（四つ仮名の混同）

・充虞〔チウ〕〔巻第四 9丁裏1行目〕

（類音字表記）

・冢〔長〕〔巻第五 4丁表18行目〕

（その他）

・繆ス〔ビヤウ〕〔巻第三 16丁裏8行目〕

「繆」の音は、本来「ビウ」が正しい。江戸時代にあつては、既に「ビュウ」の如くイ列拗音に発音されていたとみられるが、ここではそれが「ビヤウ」とア列拗音になっていて不審である。「繆」字の右傍に付せられた墨書も「ビヤウ」となっている。

（三）錦繡段

（開合の乱れ）

〈開音を合音に表記したもの〉

・雲屏〔ベウ〕〔21丁裏9行目〕・巢居〔ソウ〕〔23丁表6行目〕・荒苔〔コウ〕〔25丁裏7行目〕（本来は「ク

ワウ）

〈合音を開音に表記したもの〉

・匈奴〔キヤウ〕〔匈〕の左傍〕〔30丁表4行目〕
（四つ仮名の混同）

・遏住ス〔アツジュ〕〔18丁裏9行目〕

（類音字表記）

・重来〔丁〕〔28丁裏4行目〕

（四）詩經正文

角筆の書き入れは多くは見出されなかった。見出されたものは、全て字句の読みを書き入れたものである。そのなかに規範から外れたような例は認められなかった。⁽⁶⁾

（五）易經正文

（開合の乱れ）

〈開音を合音に表記したもの〉

・噬嗑〔ゴウ〕〔4丁表2行目〕

（シをキに表記したもの）

・著之徳〔キ〕〔31丁表3行目〕

（四つ仮名の混同）

・助也〔チヨ〕〔31丁裏10行目〕

(六) 孟子集註 論語集解 中庸章句 大学章句

(開合の乱れ)

〈開音を合音に表記したもの〉

・告子〔コウ〕「孟子集註 第二冊 卷三 6丁表2行

目」〔同 11丁表2行目〕・詳〔シヨウ〕右傍、「シヨウ

左傍」〔孟子集註 第二冊 卷四 17丁裏5行目〕・喪祭

〔ソウサイ〕「孟子集註 卷五 4丁表7行目」・放

〔ホウ〕「孟子集註 卷五 6丁裏7行目」・望〔ホ

ウ〕「孟子集註 卷五 11丁裏6行目」・兵甲〔ヘコ〕

〔孟子集註 卷六 3丁裏8行目〕・自暴〔シボウ〕〔孟

子集註 卷六 13丁裏4行目〕・礼貌（礼貌）ス〔ホウ〕

〔孟子集註 卷八 20丁裏7行目〕・暴ス〔ボウ〕〔孟子

集註 卷十一 10丁表4行目〕・一鉤（鉤）〔コウ〕

〔孟子集註 卷十一 2丁裏7行目〕・礼貌（礼貌）〔ホ

ウ〕〔孟子集註 卷十二 21丁表4行目〕・広土〔コ

ト〕〔孟子集註 卷十三 12丁表1行目〕・羊（羊）之韓

〔ヨ〕〔論語集註 卷六 23丁表2行目〕

〈合音を開音に表記したもの〉

・葬〔サウ〕〔孟子集註 卷五 3丁裏2行目〕・史魚

〔ギヤ〕〔論語集註 卷八 4丁表3行目〕

〈合拗音の直音表記〉

・禍福〔カ〕〔孟子集註 卷三 19丁表8行目〕

・頑（頑）夫〔ガンフ〕〔孟子集註 卷十 1丁裏3行

目〕・外患（外患）〔カン〕〔孟子集註 卷十二 23丁表

1行目〕・莞爾〔カンジ〕〔論語集註 卷九 3丁表4

行目〕

（ア段音をオ段音に表記したもの）

・賊フ〔ソコノフ〕〔孟子集註 卷三 23丁表4行目〕

（ウ段音をオ段音に表記したもの）

・余裕〔ヨウ〕〔裕〕の右傍〔孟子集註 卷四 9丁裏6

行目〕

（エ段音をイ段音に表記したもの）

・誰〔タリカ〕〔孟子集註 卷四 21丁表2行目〕

（四つ仮名の混同）

・丈〔シヨ〕〔孟子集註 卷四 2丁表4行目〕・充〔チ

ウ〕〔孟子集註 卷四 10丁裏4行目〕・充〔チウ〕右

傍、「シウ」左傍〔孟子集註 卷四 20丁表3行目〕・国

削〔ケズラル〕〔削〕の右傍〔孟子集註 卷六 5丁裏

7行目〕

（長音の短呼）

・丈〔シヨ〕〔孟子集註 卷四 2丁表4行目〕・匠〔シ

ヨ〕〔孟子集註 卷四 10丁裏5行目〕・兵甲〔ヘコ〕

- 「孟子集註 卷六 3丁裏8行目」・候^{（国書）}「（コ）」
「孟子集註 卷六 9丁裏7行目」・笑貌^{（国書）}「（シヨ）」
「孟子集註 卷六 18丁裏6行目」・一妾^{（国書）}「（シヨ）」
「孟子集註 卷八 23丁裏4行目」・共^{（国書）}「（シヨ）」
「（ココウ）」
「孟子集註 卷九 6丁裏6行目」・王豹^{（国書）}「（ハウ）」
「（ヒヨ）」
「孟子集註 卷十二 11丁表2行目」・広土^{（国書）}「（コト）」
「孟子集註 卷十三 12丁表1行目」・羊^{（国書）}「（ヤウ）」
「論語集註 卷六 23丁表2行目」
（シユをシとしたもの）
・三宿^{（国書）}「（シク）」
「孟子集註 卷四 19丁表2行目」
（コとホの紛れ）
・薨スレハ^{（国書）}「（コウ）」
スレハ・右傍、「（コウセハ）」
右傍、「（ホウ）」
「孟子集註 卷五 3丁裏2行目」
（平仮名と片仮名の混合表記の例）
・私カニ^{（国書）}「（ヒソカニ）」
「孟子集註 卷八 12丁裏3行目」
・播^{（国書）}「（シキ）」
テ「（シキ）」
「孟子集註 卷十一 10丁表8行目」
・譬ヘハ^{（国書）}「（たとへ）」
バ「（論語集註 卷一 10丁裏8行目）」
・篤カラ不シハ^{（国書）}「（アツ）」
「論語集註 卷十 1丁裏2行目」
・望^{（国書）}「（のツ）」
メハ「（論語集註 卷十 3丁裏2行目）」

（七）詩經

角筆の用例は少ない。全て、本文の字句の読みを示したもので、口頭語に関わるような事例は見出されない。^{（8）}

（八）孟子 道春点

角筆の用例は少ない。全て、本文の字句の読みを示したもので、口頭語に関わるような事例は見出されない。^{（9）}

（九）孟子

角筆の用例は少ない。全て、本文の字句の読みを示したもので、口頭語に関わるような事例は見出されない。^{（10）}

以上、読み中心に角筆が書き入れられたタイプの角筆文献について、文献ごとに口頭語と関わると思われる事象を掲げてきた。このタイプの角筆文献九種類のうち、角筆の書き入れが多い（一）孟子、（二）錦繡段、（五）易経正文、（六）孟子集註他三種について、共通する項目をみると、全てに開合の乱れ、四つ仮名の混乱が認められる。これら二つの事象は、安藝地方から発見された他の角筆文献にも多く認められるものである。その他、長音の短呼、シユをシとしたものなども安藝地方の他の角筆文献に認められるも

① のである。表記面では、墨書と異なる角筆の特徴として類音字表記の多用、片仮名と平仮名の混合表記の多用といったことも、注目されよう。

三、註釈の書き入れられた角筆文献

(一) 正信念仏偈要解の角筆の書き入れ

角筆の書き入れは多くはないものの、字句の読みを記したものの、字句の意味を記したものの、本文の字句をそのまま記したものの、返り点を記したものなどがあり、角筆の書き入れは多種の目的で記されている。字句の読みについては、規範から外れたような例は見出すことができなかった。

(二) 楞伽宝経註解の角筆の書き入れ

楞伽宝経は、入楞伽経、大乘入楞伽経とともに、現存する三訳の一つである。このうちで、最も多くの注釈書を残すのが、楞伽宝経である。楞伽宝経註解は、他に比べても注釈が詳細になされ、経文によって自説を説くなど、楞伽宝経の注釈書の中で、最も優れたものの一つである。

先にも述べたが、この文献の角筆の書き入れには、字句の読み方を示したもの他に、字句の注釈を示したものが多数存する。この文献の角筆の書き入れは、ほぼ各丁に

亘って付されているものの、凹みのかなり薄いものもあり、全てを解読し得ていない段階ではあるが、既に解読し得ているもののなかから、いくつかを取り上げ解説を加えておきたい。尚、角筆の書き入れと墨書の書き入れとの先後関係は、角筆の線と墨書の線とが交差する部分に、墨の掠れや墨の溜まりが認められないことから、墨書の方が先に書き入れたものと見られる。

まず、本書における角筆の書き入れの内容を、分類しておく。

① 刷られた本文の字句をそのまま習字風に記したものの

・ 則情縦ニシテ 肆テ 流シテ而 返ルコトヲ忘レ

テ至ル〔肆〕「序 1丁裏10行目」

・ 此〔ノ〕 経凡〔ソ〕 四訳アリ〔凡〕「上巻 1丁表6行目」

② 字句の読みについて墨書と同じものを書き記したものの

・ 「于」其ノ忠孝ヲ失ヒ〔墨書〕 俗〔ヲ〕 敗シ常ヲ乱ルニ

〔墨書〕 甘〔ジ〕 テ刑 辟踏フ〔ヒ〕 失〔失〕の右傍、

「ルニ」・「乱」の右傍「序 2丁表1行目」

・ 乱ルニ〔墨書〕 ミダ〔ルニ〕「序 2丁表1行目」

③ 字句の読みについて墨書とは異なるものを書き記したものの

の

・為(サ)レム(墨書)(ナサ「ルコトハ」)[序 2丁表
5行目]

・奏ノ(墨書)世ニ准(ジ)行ハル(墨書)。(行「ス」)
[序 2丁表10行目]

④字句の読みについて二種の異なる墨書のうち、一方と同じものを書き記したもの

・復フ(右傍・墨書)フク(左傍・墨書)札レイ(右傍・
墨書)ライ(左傍・墨書)「フクライ」[上巻 1丁表
8行目上欄外]

⑤墨書にない字句の読みを書き記したもの

・摩帝菩薩(「テイ」)[上巻 3丁裏5行目]
・何(ヲカ)云(ハク)(何ヲ「カ」云ハク)[上巻 6丁
裏6行目]

⑥返り点などの符号を角筆で書き記したもの

・唐訳ヲ註シテ(唐訳ヲ「註」)[上巻 5丁裏7行
目]

・痴惑(ヲ)見(「痴惑ヲ」見)[上巻 6丁表4行目]

⑦本文の字句の注を書き記したもの

・三昧自在(ノ)之力アテ(「八地已上」)[上巻 2丁裏
6行目]

・覚ニ背(キ)塵ニ合テ(「四万人」)[上巻 4丁表3行
目]

当文献には、三冊に亘り、本文字句の注が角筆で詳細に書き入れられている。中には、凹みが薄いために、判読困難なものも存するが、概ね解読することが出来る。判読しがいのような角筆の書き入れの解読に当たっては、楞伽阿跋多羅宝経集の注釈書として知られる、仏語心論を利用することが有効であった。仏語心論は、正中二年(一二三二五)に虎関師練によって撰述された、求那跋陀羅訳「楞伽阿跋多羅宝経集」全十八巻の注釈書である。角筆文献の角筆の注は、仏語心論の注と共通するところが極めて多い。仏語心論を利用して、注を付したかとも思われるほどである。以下、角筆文献の角筆の注と、仏語心論の注との間で、共通するものを対応させて掲げていくこととする。

尚、以下に掲げる用例は、次の順で示している。

〔①、角筆の書き入れ ②、角筆の書き入れが付された本文字句 ③、②の所在頁及び行数 ④、角筆文献の本文字句②に対応する仏語心論本文¹²⁾ ⑤、④の所在頁及び行数 ⑥、④の本文に対する虎関師練の註釈のうち、①と共通する部分(①と共通する語句に傍線を付す) ⑦、解説 用例

の二番目以降も、以上の書式に準じる」

○「定中」① 何所作生・進_レ去及_レ持_レ身②

上卷 6丁裏7行目③

(何所作生 進_レ去及持身)④ 仏語心論 38頁下9行目⑤

平箋。此章亦是定_中之事。因上諸定相從而來。所作生者定_中變化。謂定修因及感果等。進_レ去者是定_中游戲。持身定_中長時住也。智箋成作。句相事句。⑥

解説 「何所作生 進_レ去及持身」に角筆で「定中」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に同じく「定中」という表現あり。⑦

○「体」云「何三昧心。最勝為_レ我説」

上卷 7丁表4行目

(云何三昧心 最勝為我説) 仏語心論 39頁下1行目

平箋。此三種問皆是定事。神通云用。三昧云相。三昧心体問。唐訳本云三昧心何相。今作体箋。似相乖何。答何相之相非体相相。各有相。曰各有相何。曰三種亦是各有相故。智箋平等。問。何配等智。答自在三昧平等一相。句相明句。解説 「三昧心」に角筆で「体」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に同じく「体」という表現あり。

○「三」云「何建立_レ立_レ相。及與非_レ我_レ義

上卷 7丁表9行目

(云何建立相 及與非我義) 仏語心論 40頁上8行目

平箋。非我誹謗。此經能說建立誹謗。智箋平等。句相三輪。問。智句相何。答。三輪句者三業之謂。身口意也。三業輪転循環起作。建立誹謗二辺惡見皆是三業輪転所生。如來転智平等一性。

解説 「非我」に角筆で「三」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に同じく「三」という表現あり。

○「五」無我相 上卷 7丁表9行目

(心意及與識 無我相有五 自性想所想 及與現二見 乘及諸種性 金銀摩尼等 一闍提大種 荒乱及一仏 智爾焰得向 衆生有無有 象馬諸禽獸 云何而捕取 譬因成悉檀及與作所作 叢林迷惑通 心量不現有 諸地不相至 百變百無受 医方工巧論 伎術諸明处) 仏語心論 65頁下2行目

平箋。此五偈句第三闍提。四偈三句皆是牒領。第四偈終一句婉文。其牒領者。初一偈心意及與識是云何名為藏及意識也。無我法有五。無我是何等二無我也。法有五云五法也。問中雖無。一類并説。自性想所想。是自性及與心也。及與現二見是云何現分別也。

解説 「無我相」に角筆で「五」とあり。仏語心論には「無

我」と「五」とが関連づけられて説かれている。

○「起」常見不生^ト 上卷 7丁表10行目

(及常見不生) 仏語心論 40頁下4行目

平箋。此句二問。常見即是尋常常見。不生猶如言不起也。此不生語兼上斷見。智箋圓鏡。句相常不。

解説 「不生」に角筆で「起」とあり。本文の当該個所にあ

たる注釈中に同じく「起」という表現あり。

○「三十二字」「八字」

伽陀二有二幾種カ一 長一頌及ヒ短一旬

上卷 8丁裏4行目

(伽陀有幾種 長頌及短句) 仏語心論 44頁下2行目

平箋。伽陀梵音。此云諷誦。有重頌及孤起二異。長頌辰

行。短句諸偈七五四言。問。長頌何故為長行耶。答。頌是偈義。印度文詞。三十二字名为一偈。不必五七齊整句也。

是故長行亦名長頌。又長頌者。三十二字同上偈數。以單八

字為短句也。成魏作法。唐作道理。彼此審詳云修多羅。或翻契經亦云法本。魏唐法理共法本義。宋訳成字。契經之義。

(有重頌及孤起二異) 仏語心論 44頁下4行目

以單八字為短句也

解説 「長頌」「短句」に角筆で「三十二字」「八字」とあ

り。本文の当該個所にあたる注釈中に同じく、長頌が

「三十二字」、短句が「八字」と説かれる。広島女学院
大学蔵『楞伽經宗通』⁽¹³⁾(角筆文獻)にも、「重頌有(リ)。
或ハ長篇。或ハ短句」(第一冊 卷一 31丁表5行目)
という本文の所で、「長篇」の右傍に角筆で、「三十二
字」とある。

○「第四果」

解一脱^ハ是レ無学。修行^ハ是学弟子^ニ有^ニ幾種[。]

上卷 9丁表右欄外

(解脱修行者 是各有幾種) 仏語心論 45頁下9行目

平箋。解脱無学。修行有学。問。上解脱句與是何異。答。
上法是人。智箋圓鏡。句合果句。問。四果豈與鏡智合耶。

答。此無学位并摩訶衍。

解説 「無学」に角筆で「第四果」とあり。本文の当該個所

にあたる注釈中に「四果」という表現あり。

○「進」「生」の右傍

云何。修一行^ノ退 云何修一行^ノ生。

上卷 9丁裏6行目

(云何修行退 云何修行生) 仏語心論 47頁下9行目

是云修行進退之事。退如身子六住退也。智箋圓鏡。句合

因句。問。智句合何。答。諸行進退皆依修因。其進退者

修行之相。

【解説】「生」に角筆で「進」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に同じく「進」という表現あり。

○「妄想」何ッ不_{シテ}一切ノ時ニ演_セ真実義。

而復。為_シ衆生ノ。分別説_ク心量ヲ。

上巻 12丁表4行目

（何ノ一切時 演説真実義 而復為衆生 分別説心量）仏語心論 51頁下12行目

平箋。真実義者第一義諦心量者は妄想心量。智箋觀察。

句合方便

（心意及與識 無我法有五 自性想所想 及與現二見 乘及諸種性 金銀摩尼等 一闡提大種 荒乱及一仏 智爾焰得向 衆生有無有 象馬諸禽獸 云何而捕取 譬因成悉檀 及與作所作 叢林迷惑通 心量不現有 諸地不相至 百變百無受 医方工巧論 伎術諸明処）仏語心論 65頁下2行目

故第一闋無自性者明身業妄。第二闋之起心說者明口業妄。

第三闋之心量句者明意業妄。三業不実。虚妄言説。諸名相法。何為実有。仏三闋破無嘸類矣。

【解説】「心量」に角筆で「妄想」とあり。本文の当該個所に

あたる注釈中に同じく「妄想」あるいは「妄」という表現あり。「妄想心量」という表現もみえる。

○「稽」（「鶏羅」の右傍）「大小」

鶏羅及鐵圀。金剛等ノ諸一山。

無一量ノ宝莊嚴。仙一闡一婆充一満ス。

上巻 12丁表右欄外

（鶏羅及鐵圀 金剛等諸山 無量宝莊嚴 仙闡婆充満）仏語心論 51頁下17行目

其第五云稽羅山

平箋。初半偈。立世阿毘曇論六大国品云。閻浮樹外有二

林。内名訶梨勒。外名阿摩勒。阿摩勒果熟時其味最美。如細蜂蜜。果形大小如二斛器。訶梨勒果味如蜂蜜。形大小兩陪於前。

【解説】「鶏羅」に角筆で「稽」とあり。本文の当該個所にあ

たる注釈中に「稽羅」という表現あり。また、「鐵圀」に角筆で「大小」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「大小」という表現あり。

○「十波羅」無一上世一闋一解。聞_テ彼ノ所一説ノ偈ハ。大

乗ノ諸一度一門。諸仏ノ心第一_{ナルヲ}善哉善哉問_フ。大慧一善_ヲ諦ニ聴_ク。

上巻 12丁表7行目

（無上世問解 聞彼所説偈 大乘諸度門 諸仏心第一 善哉善哉問 大慧善諦聴）仏語心論 63頁下17行目

平箋。説異一重之二。総大科第二之四。別大科第二之二。此二偈句當是長行。故唐訳本作長行也。宋訳有之亦朴古文。諸度門者十波羅蜜。諸仏心者。本註云堅實心也。非念慮心也。仏聞大慧百八問偈大乘度門第一義心最上問題。

〔解説〕「大乘諸度門」に角筆で「十波羅」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「十波羅」という表現あり。

○「第二」三昧記一心得 上巻 13丁表5行目
（三昧起心説） 仏語心論 64頁下15行目

平箋。三偈頌是第二闍振。二偈三句及以二字皆是牒領。

〔解説〕「三昧起心説」に角筆で「第二」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「第二」という表現あり。

○「十里」 肘歩拘一樓舎 半由一延由延

上巻 14丁表6行目

○「一偈半尺スウリヤウ」 兔毫窓塵蟻 羊毛麴麦塵

上巻 14丁表10行目

（肘歩拘樓舎半由延由延 免毫窓塵蟻羊毛麴麦塵） 仏語心論 66頁下11行目

問。大慧暗此実乖問乎。答。其实不爾。主伴問答普應群機大慧之間能應機也。若非此問争得如来自覺真説。始一偈器界根身二種有法。幾微塵量積成作乎。下中上身。下肖翹等。中四洲人。上阿修羅摩醯首羅。次一偈半云尺數量。一

一刹土幾塵所成。及弓肘等。印度數量以弓為準。故拘樓舎翻五百弓。肘亦竺量一尺八寸。或云二尺。步震單量。司馬法云。六尺為步。拘樓舎者魏訳不梵只云十里。恐亦十里拘樓異翻。雜寶藏即翻云五里。

〔解説〕「肘歩拘樓舎半由延由延」に角筆で「十里」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に「十里」という表現あり。広島女学院大学蔵『楞伽經宗通』に、「肘ト歩ト。拘樓舎ト。」という本文の注釈には、「此ニ八十里ト云。五弓一丈ヲ成ス。二十丈ヲ一息ト名（ク）。八十ノ息ヲ一俱盧舎ト名（ヅク）。八ノ俱盧舎ヲ一由旬ト名（ヅク）」とあり、「十里」という表現が使われている。また、「免毫窓塵蟻羊毛麴麦塵」に角筆で「一偈半尺スウリヤウ」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「一偈半尺數量」という表現があり、角筆の「スウリヤウ」とは「數量」であろうと推測される。

○「八地上」 是等ハ所ナリレ応キレ請。 上巻 15丁表3行目
（此等所応請） 仏語心論 67頁上3行目

今此偈意。八地上事。

〔解説〕「是等ハ請コ（フ）応キ所ナリ」に角筆で「八地上」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八地上」という表現あり。

○「生」「現」の右傍「云何現」「已滅」

上卷 15丁裏6行目

(云何現已滅) 仏語心論 69頁下12行目

次一偈云何現已滅是云何生興滅及見已還也。

【解説】「現已滅」に角筆で「生」とあり。本文の当該個所

にあたる注釈中に「生」という表現あり。

○「ケツリヤウ」云何樹葛藤 領「林樹蔓草」

最勝子所問。云何種種利

上卷 16丁表8行目

(云何樹葛藤 最勝子所問 云何種種利) 仏語心論 69頁

下7行目

聰明魔施設量也。云何樹葛藤是云何為蔓草也。終句領結。

次一偈云何種種利是如來云何於一切時利現一偈。

【解説】「最勝子所問」に角筆で「ケツリヤウ」とあり。本

文の当該個所にあたる注釈中に「領結」という表現あり。「ケツリヤウ」は、これに関連するか。

○「実相」

一ノ相相応シテ遠ニ離ス諸ヲ見過ヲ悉擅離ニ言説ス

上卷 16丁裏10行目

(一一相相応 遠離諸見過 悉擅離言説) 仏語心論 71頁

下3行目

平箋。大慧諸問。如來世尊初加摩斥。中出微旨。餘皆牒

領。其微旨者開示実相。蓋以実相見諸名相。即諸名相皆是

実相。是故如來許與稱讚。問皆如実。言諸名相咸皆好問即

是実相。此二偈半承上生下。始一偈彼此衆多。汝名相問。

一一皆與実相相応。相応之故離諸見過。蓋諸名相不応実相

即為諸見。

【解説】「一一ノ相相応シテ」に角筆で「実相」とあり。本文

の当該個所にあたる注釈中に「実相」という表現あり。

○「転業真因」「動作異因」

大慧諸識ニ有三種ノ相一 謂ク転相。

業相。真相ナリ。

(大慧諸識有三種相。謂転相。業相。真相。) 仏語心論 78

頁下9行目

転識蔵識真相若異者蔵識非因。

【解説】「大慧諸識ニ三種ノ相有り」に角筆で「転業真因」と

あり。本文の当該個所に「転相」「業相」「真相」とい

う表現あり。「転業真因」は、これに関連するか。広島

女学院大学蔵「楞伽經宗通」(第二冊 卷二 2丁裏

9行目)にも「大慧。諸(ノ)識ニ有三種ノ相有(リ)。

転相。業相。真相ナリ」と記されている。また、角筆

で「動口異因」ともあり。本文の当該個所にあたる注

釈中にも「動」「因」という表現あり。

○「七シユ」於此ノ性ノ義非レ有非無中ニ

上卷 27丁表4行目

(二七性心分第二 復次大慧。有七種性自性。所謂集性自性。性自性。相性自性。大種性自性。因性自性。緣性自性。成性自性。) 仏語心論 83頁上1行目

【解説】「此ノ性義」に角筆で「七シユ」とあり。仏語心論で

「性」について書かれたところに「七種」という表現

あり。さらに、広島女学院大学蔵「楞伽經宗通」(第二

冊 卷二 12丁表1行目)でも、「復次二大慧、七種ノ

性自性有(リ)」のごとく、「性」と「七種」とを関連

させて説かれている。

○「二種邪正」

大慧。若シ復タ諸餘ノ沙門婆羅門ハ。見_レコト。離_レ自性ヲ

浮_レ雲火ノ輪捷闍婆ノ城無_レ生_{ナル}。幻ノ焰水月及夢。

内外心ノ現ノ妄想無_レ始ノ虚ノ偽。不_ス離_レ自心ヲ

上卷 30丁表1行目

(大慧。若復諸餘沙門婆羅門見離自性浮雲火輪捷闍婆城無生幻焰水月及夢。内外心現妄想無始虚偽不離自心。) 仏語心論 87頁上14行目

格箋。此章平説。平箋。二種邪見断常已了一种正見。此

則問偈不生答。此章八段。一人二見。三解。四滅。五離。

六別。七地。八智。若至門一也。見至夢二也。内至心三也。

妄至尽四也。離至識五也。於至忘六也。無至滅七也。自至

別八也。人段。邪正先後次第識演。故云若復邪正真偽亦須

簡別。故云諸餘。見段二種。一離性。二無生。浮至城一也。

【解説】「諸餘ノ沙門婆羅門ノ頭ス」に角筆で「二種邪正」と

あり。本文の当該個所にあたる注釈中に「邪見」「正

見」「邪正」という表現あり。

○「七六」識浪 上卷 35丁表2行目

(爾時世尊。告大慧菩薩言。四因緣故眼識轉。何等為四。

謂自心現摂受不覺。無始虚偽過色習氣計着。識性自性。欲

見種種色相。大慧。是名四種因緣。水流処藏識轉識浪生。

大慧。如眼識一切諸根微塵毛孔俱生隨次境界生亦復如是)

仏語心論 92頁下9行目

(水流処者上流注也。言第八識流注微細不可見処。七六転

識波浪生故。是諸根識可見者也。) 仏語心論 93頁上段5

行目

【解説】「識浪」に角筆で「七六」とあり。仏語心論で「識浪」

について書いたところに「七六」という表現あり。

○「七」因ノ所ノ作ノ相ノ異ノ不ノ異ヲ。合_{シテ}業生ノ相_ニ。

上卷 35丁表2行目

(因所作相異不異合業生相) 仏語心論 93頁上12行目
是藏識中餘七生相

解説 「所作ノ相」に角筆で「七」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「七」という表現あり。

○「法性五行」

得自在力・神通三昧ヲ諸善ヲ知リ識ス佛ノ子眷屬タリ

上巻 36丁裏3行目上欄外

(得自在力神通三昧諸善知識仏子眷屬) 仏語心論 94頁下段10行目

格箋。餘至度平説。是至識教説。爾至言頌詞。平箋。平段五種。一慧。二資。三修。四証。五離。餘至義一也)

解説 「自在力・神通三昧ヲ得」に角筆で「法性五行」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「平段五種。一慧。二資。三修。四証。五離。餘至義一也」という表現あり。角筆の「法性五行」は、この部分と関係あるか。

○「四住地」(『業愛』の右傍)

彼ノ心ノ意識識。自ノ心所ノ現ノ自ノ性ノ境ノ界

虚妄之想。生死ノ有海。業愛無知。如キレ是等ノ因。

悉ク已レ超レ度ス。

上巻 36丁裏5行目

(彼心意識自心所現自性境界虚妄之想。生死有海業愛无

知。如是等因悉已超度。(中略) 一切三昧諸神通事皆得自在。是智用極。同類菩薩大衆為属。是伴類成。離種。彼菩薩人知諸境界。皆是心識自性境界。故於三有生死因縁皆悉超離。蓋業愛者云四住地。無知者云無明住地。) 仏語心論 94頁下10行目

解説 「業愛無知」に角筆で「四住地」とあり。仏語心論で「業愛」について書かれたところに「四住地」という表現あり。

○「六」意識 上巻 37丁裏5行目
(謂以彼意識) 仏語心論 96頁上10行目
意識六識。(中略) 言以六識思付諸識。

解説 「意識」に角筆で「六」とあり。仏語心論で「意識」について書かれたところに「六」という表現あり。

○「六」諸ノ識ハ識ヲ所ノ識ヲ 上巻 38丁裏4行目
(諸識識所識) 仏語心論 96頁下5行目
問第六何故云諸識耶

解説 「諸識ハ所識ヲ識ル」に角筆で「六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「六」という表現あり。

○「七」彼ノ業悉ク無レ有マツト。 上巻 39丁表9行目

(彼業悉無有) 仏語心論 97頁下16行目

彼業云七。自心所撰云六識也。所字不是能所之所。言實際

中本無七識業相之法。

【解説】「彼ノ業」に角筆で「七」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「七」という表現あり。

○「五」識者ハ識ル所一識ヲ 上巻 40丁裏6行目

（識者識所識）仏語心論 99頁上6行目

終半偈五識。（中略）五種。五識現起無定次第。

譬如海波浪 是則无差別 諸識心如是 異亦不可得 心名採集業 意名広採集 諸識識所識 現等境說五（中略）起多種識故云諸識。曰五何所識。曰六識能入五識所入。故云所識。中之識字了別之義。終句五識五識有相。故云現境。

仏語心論 96頁下5行目

【解説】「所識ヲ識ル」に角筆で「五」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「五」という表現あり。

○「七」（二字目）「意」右傍「六」（二字目）「意」右傍

意者ハ意謂然タリ 上巻 40丁裏6行目

（意者意謂然。）仏語心論 99頁上6行目

初句六識。次句七識。終半偈五識。六種解見上。七種。

（爾時世尊以偈答曰

若說真実者 彼心無真実 譬如海波浪 鏡中像及夢 一切俱時現 心境界亦然 境界不具故 次第業転生 識者識所識 意者意謂然 五則以顯現 無有定次第）仏語心論 99

頁上3行目

（上意七識下意心也。七識心朴無了別性。不知妄起。於識生法。錯謂性相定有本然。仏語心論 99頁上3行目

【解説】「意者ハ意謂然タリ」に角筆で「七」「六」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に「六識」「七識」「六種」「七種」という表現あり。角筆の「七」「六」は、これと関連するか。

○「五」故ニ云レ識ル所一識ヲ也。 上巻 40丁裏9行目

（識者識所識）仏語心論 99頁上6行目

終半偈。（中略）五種。五識現起無定次第。

【解説】「所識ヲ識（ト）云（フ）「也」」に角筆で「五」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「五種」「五

識」という表現あり。角筆の「五」は、これと関連するか。

○「文無」譬ハ如工ル画師。及與画弟子 布テ彩シ

図ルカ衆形ヲ。 上巻 41丁表1行目

（譬如工画師 及與画弟子 布彩図衆形 我說亦如是 彩色本無文 非筆亦非素 為悦衆生故 綺錯絵衆像）仏語心論 99頁下8行目

彩本無文

【解説】「工画師」に角筆で「文無」とあり。仏語心論で「工

画師」について書かれたところに「無文」という表現あり。角筆の「文無」は、これと関連するか。

○「別」而陰界入垢衣所纏。

中巻 1丁表6行目

(而陰界入垢衣所纏) 145頁上13行目
貪欲悲痴云別法也。

【解説】「纏貪欲」に角筆で「別」とあり。本文の当該個所に

あたる注釈中に「別」という表現あり。

○「住滅」見レハ離自性ト。生見モ悉滅ス。

中巻 5丁表9行目

(見離自性生見悉滅) 148頁下12行目

生見無故住滅。(中略) 豈亦有生住滅見乎。智箋平等。問答。
離生住滅諸性平等。

【解説】「生見悉滅」に角筆で「住滅」とあり。本文の当該個

所にあたる注釈中に「住滅」という表現あり。

○「智ヲメテ相トス」(「相身」の右傍)

転ニ捨心意識五法自性二無我相身ヲ。

中巻 7丁表1行目

(転捨心意識五法自性二無我相身) 144頁下16行目

日地上菩薩離業道身。得法性身法性之身以智為相。法性之
身智之為相猶業道身之血肉也。

【解説】「相身」に角筆で「智ヲメテ相トス」とあり。本文

の当該個所にあたる注釈中に「智為相」「智之為相」と
いう表現あり。角筆の「智ヲメテ相トス」は、これと
関連するか。

○「宗」(「二種」の右傍) 疾得^テ阿耨多羅三藐三菩提^ヲ

以^テ言說所說二種趣^ヲ。淨^ム一切衆生^ヲ。

中巻 11丁表2行目

(疾得阿耨多羅三藐三菩提以言說所說二種趣淨一切衆生)

154頁下8行目

疾至生跏啓。佛至教如例。平箋。挙段。此間即是此經宗趣。

【解説】「二種」に角筆で「宗」とあり。本文の当該個所にあ

たる注釈中に「宗」という表現あり。

○「外道」謂從無始戲論妄執習氣^一

中巻 12丁表1行目

(無始虛偽計着過自種習氣生。) 156頁上7行目

不是言說妄想惡覺凡夫外道二乘境界。

【解説】「謂從無始戲論妄執習氣」に角筆で「外道」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に「外道」という表現
あり。

○「相」無始^ノ習氣計着^ヲ相現^ス 中巻 16丁表1行目

(無始習氣計着相現) 161頁上9行目

非有無城云惑相也。(中略)不知心現云惑相也。

解説 「無始習氣」に角筆で「相」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「相」という表現あり。

○「因」 如「捷闌婆城」 中巻 16丁表1行目
(如乾闥婆城) 161頁上9行目

無始習計云惑因也。(中略)虚偽習計云惑因也。

解説 「如捷闌婆城」に角筆で「因」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「因」という表現あり。

○「因」 愚小無智ニシテ作メ摩尼想計着ニ追テ逐ス。

中巻 17丁裏4行目

(愚小無智作摩尼想計着追逐。)(162頁下17行目)

愚小無智云惑因也。

解説 「愚小無智ニシテ」に角筆で「因」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「因」という表現あり。

○「別」「仏ト外ト」 復次大慧有三種ノ量ノ五分論。

各建一立シ已テ。得聖智自覺

中巻 17丁裏10行目

(復次大慧。有三種量五分論。各建立已得聖智自覺。)(163

頁上10行目)

言諸外道声聞人等依三五法得自覺智。(中略)第一之卷二種声聞分別相中得自覺聖差別相是。

解説 「復次大慧有三種ノ量五分論。各建立已得聖智自覺」

に角筆で「別」「仏ト外ト」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「外道」「別」という表現あり。角筆の「別」「仏ト外ト」は、これと関連するか。

○「四」「真諦」の右傍「十二ノ二」「縁起」の右傍

真諦ノ縁一起ナリ。道一減ハ解一脱ス。中巻 22丁表2行目
(真諦縁起。道減解脫)(168頁上6行目)

真諦四諦。縁起即言十二因縁。道減即四諦二法。(中略)今以結集為三藏何。日十二部中有論義經。

解説 「真諦」「縁起」に角筆で「四」「十二ノ二」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に「四」「十二」という表現あり。

○「三」「諸乘」の右傍「十」「諸地」の右傍

分一別ス諸乘・及諸一地ノ相。中巻 22丁表5行目

(分別諸乘及諸地相)(168頁下12行目)

諸乘三乘。諸地十地。(中立)善說諸乘十地之相。

解説 「諸乘」「諸地」に角筆で「三」「十」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「三」「十」という表現あり。

○「分明義」 觀一察義一禪一是偏教一菩薩、所修者ナリ。

中巻 23丁裏6行目

(觀察義禪) (170頁上12行目)

蓋觀察者猶言分明。明之見物分明者也。心之有察亦猶如彼地上菩薩思惟真理。於其分智分明不誤。智箋觀察。(170頁下6行目)

○「無相」「依ノギ」「縁」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「觀察義禪ハ是偏教ノ菩薩」に角筆で「分明義」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「分明」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」「縁」の右傍 是名攀縁如禪。

中卷23丁裏10行目

(是名攀縁如禪) (170頁下10行目)

無相攀縁。子之所言慮知攀縁。今攀縁者無相者也。(中略)攀縁如禪八地上智。且雖仮出能所依相。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「是名攀縁如禪」に角筆で「無相」「依ノギ」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「無相」「依」という表現あり。

○「本体ヲ云」云何如来禪。謂入如来地。

中卷24丁表6行目

(云何如来禪。謂入如来地) (171頁上11行目)

一体二用。謂至地一也。行至事二也。体種。如来地者禪之体相。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

中卷23丁裏10行目

〔解説〕「云何如来禪、謂如来地二入二」に角筆で「本体ヲ

云」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「体」という表現あり。

○「菩薩ネハン」「自覚聖智相」の右傍

得_二自_一覚聖智ノ相・三種ノ樂_一住_二ヲ_一。中卷24丁表6行目
(行自覚聖者四智全具。三種樂者。一禪定樂。二涅槃樂。三菩薩樂。)(171頁上11行目)

○「自覚聖智相」に角筆で「菩薩ネハン」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「涅槃」「菩薩」という表現あり。

○「八七六」「藏意識」の右傍

一切自性ノ習氣。藏_二意_一意識ノ見_一習_二轉_一變_二ヲ_一。

○「八七六」「藏意識」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

○「無相」「依ノギ」の右傍 是名攀縁如禪。

〔解説〕「藏意識」に角筆で「八七六」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「八七六」という表現あり。

【解説】「非性」に角筆で「無」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「無」という表現あり。

○「石女兒」(『兎角』の右傍) 謂、兎、角、龜、毛等

中巻32丁表1行目

(謂兎角龜毛等) (181頁下3行目)

繫天子此云石女兒 (182頁15行目)

【解説】「兎角」に角筆で「石女兒」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「石女兒」という表現あり。

○「自」如、是性妄想 中巻 33丁表8行目
(如是性妄想) (182頁下13行目)

是即妄想自性所作

【解説】「性妄」に角筆で「自」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「自」という表現あり。

○「不見」(『夫』の右傍) 非愚夫現

中巻 38丁裏4行目

(非愚夫現) (188頁下3行目)

愚夫雖見不能正觀

【解説】「夫」に角筆で「不見」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「見不」という表現あり。

○「文」(『形』の右傍)「字」(『形』の右傍)

随、入義句形、見、中巻 41丁表5行目

(善觀名句形見菩薩摩訶薩隨入義句形見) (191頁上3行目)
形字有異。魏本作字。唐訳作文。(中略) 仏欲學者依文入義故云隨入句形見文承上句也。

【解説】「形」に角筆で「文」「字」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「字」「文」という表現あり。

○「法」(『事』の右傍)

名、身者。謂、若、依、事、立、名。

中巻 41丁表6行目

(名身者謂若依事立名) (191頁上16行目)
是云心法。名段。諸法元始末有名号。

【解説】「事」に角筆で「法」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「法」という表現あり。

○「声」(『短』の右傍)「音」(『高下』の右傍)

又形、身者。謂、長、短、高、下。中巻 41丁表8行目

(又形見者謂長短高下) (191頁下11行目)

謂、声、長、短、音、韻、高、下

【解説】「短」「高下」に角筆でそれぞれ「声」「音」とあり。

本文の当該個所にあたる注釈中に「声」「音」という表現あり。

○「當」

以、離、一、異、俱、不、俱、見、相、我、所、通、義、上

（未來世智者當以離一異俱不俱見相我所通義問無智者彼即答言）（192頁下10行目）

當來智人試以佛說離四句之正通真義問惡智者。（中略）或藏之中當字作善。

〔解說〕「一異俱不俱ノ離ル（ヲ）以テ」に角筆で「當」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「當」という表現あり。

○「外道」問ハニ無一智者ニ。中卷 42丁裏6行目（問無智者）（192頁下10行目）

離四句義外道生怖。為離此恐於着四句作置答論。止種。外道妄想依聞言說起計着見。（中略）外道計着四句之義。

〔解說〕「無智ノ者ニ問ハ」に角筆で「外道」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「外道」という表現あり。

○「能」如是涅一槃諸一相所一相。

中卷 42丁裏7行目

（如是涅槃諸行相所相）（192頁下12行目）

能相所相三也。求那云依。能所依四。能所造五。能所見六。

〔解說〕「相所相」に角筆で「能」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「能」という表現あり。

○「無生」又世尊說ニ不生不滅是如来異一名ナリト。

（又世尊說。不生不滅是如来異名。）（286頁下6行目）上分佛說三藐佛陀為無生滅。（286頁下13行目）

〔解說〕「不生不滅」に角筆で「無生」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「無生」という表現あり。

○「大力」有下知ニ毘紐一者ト。下卷 8丁裏9行目（有知一切導者。有知仙人者。有知梵者。有知毘紐者）（288頁上9行目）

十修淨行故。十一此云大力。（288頁下2行目）

〔解說〕「毘紐」に角筆で「大力」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「大力」という表現あり。

○「初至十地」

不ニ善ス了一ニ知一一切ノ法。一一切ノ地。一一切ノ相ヲ。

（不善了知一切法一切地一切相）（290頁下10行目）下卷 12丁表8行目

曰一切地何。曰云十地也。（291頁上1行目）

〔解說〕「一切地」に角筆で「初至十地」とあり。本文の当該個所にあたる注釈中に「十地」という表現あり。

○「チエ」覺一知ノ不レ現ト是故ニ空不生ナリト。

下卷 18丁表9行目

（覺知性不現 是故空不生）（296頁上5行目）

覚知性者云智慧也。(296頁上12行目)

【解説】「覚知」に角筆で「チエ」とあり。本文の当該個所に
あたる注釈中に「智慧」という表現あり。

○「果」非因不_レ相_レ応_{ニシテ}事_一生_ニト。

下巻 26丁表6行目

(非因不相似事生)(302頁上6行目)

因不相似非果事生(303頁上5行目)

【解説】「事生」に角筆で「果」とあり。本文の当該個所にあ
たる注釈中に「果」という表現あり。

○「七」意、如_レ和_レ伎_一者。下巻 46丁表4行目

(意如和伎者)(322頁上2行目)

第七意識応和伝報示導伎人(322頁上4行目)

【解説】「意如」に角筆で「七」とあり。本文の当該個所にあ
たる注釈中に「七」という表現あり。

以上、楞伽宝経註解における角筆の書き入れと、仏語心
論とで、表現の共通する個所を記してきた。その結果から
は、両者の関わりの深いことが知られる。もちろん、これ
によって、ここでの角筆の注釈が、直接、仏語心論によっ
て成されたということにはならないが、仏語心論に類する
何かの注釈書によって、当該文献の角筆の書き入れが加え

られたという可能性は、十分に考えられよう。

また、角筆の書き入れの信頼性についていえば、先の考
察のとおり、角筆の注は、注釈書の内容とはほぼ合致してい
ると考えられ、註釈としての信頼性は高いと言えよう。

従って、角筆によって書き入れられた注釈も、教義解釈の
研究の一助たり得るものと考えてよからう。

楞伽宝経の注釈書で、角筆が書き入れられているものは、
全国各所か多数見つかっている。それらの、角筆文献にお
ける角筆の書き入れを、相互に比較検討していけば、楞伽
宝経の注釈の過程、或いは近世における教義解釈の状況が
浮かび上がってくるのではないかと考えている。そのため
には、楞伽宝経の注釈書に書き入れられた角筆をまずは解
読し、それを相互に比較するとともに、今行なったような
既刊の注釈書と比較していくという作業を重ねていくこと
が必要であらう。

おわりに

本稿では、東広島市志和町奥屋にある報専坊の蔵書から
見つかった角筆文献について、それらを角筆の書き入れの
内容により、二種のタイプに分けて考察した。その二種の
タイプとは、字句の読みを中心に書き入れられた角筆文献

群と、本文の字句を中心に書き入れられた角筆文献群である。報専坊の前者の角筆文献群からは、開合の乱れ、四つ仮名の混乱、長音の短呼、合拗音の直音表記、シユをシとしたものなどの事象が見出された。この事象が、直接、志和町奥屋の近世の口頭語を示すものかどうかということについては、なお慎重に考える必要があるが、これらの事象が安藝地方の他の箇所から見つかった角筆文献とも共通するものであることが知られたのは有意義であつた。また、後者のタイプに属する楞伽宝経註解の書き入れからは、楞伽宝経の注釈において、仏語心論か、それに類する注釈書との関わりが推測された。

平成十二年三月現在で、全国から三千点を越える角筆文献が発見されている。しかし、そのうちの大部分が、発見されたままで未解読のままの状態である。発見された角筆文献の中には、角筆の書き入れの多いものもあれば少ないものもある、さらには、角筆がどこでいつ書き入れられたかということが分からないものも多い。しかし、発見したものも多くについて、角筆の書き入れを読まない状態で止めているのは残念なことである。角筆の書き入れを読んでいくことによって知られることも、存するはずである。当時の録音資料が残されていない以上、国語史は、文献に書

かれた文字に多くを頼らざるを得ない。そこに文字が書かれている以上、それを大事にし、これを読みとつていくことが、国語史を研究していく基本的態度であるはずである。拙稿の筆者も、これまで多くの角筆文献を発見してきたが、発見を急ぐあまり、その多くの角筆の書き入れを詳細に解読せずに今日に至っている。このことを反省しつつ、今後は、既発見の角筆文献の精査に重きをおいて文献調査を進めていきたいと考えている。

(注)

(1) 帝釈山には、次のような伝説が残っている。

敏達天皇の時代(五七二)、帝釈山の麓に一人の狩人がいて、ある日山に光る物があるので行ってみると一体の鬼神がいた。この鬼神が狩人に、「吾は帝釈山天王である。吾此の地を守護せんがためにここに降臨した。汝は吾を安置せよ」と告げて、姿を消したという。消えた跡に帝釈天の金像があつたので、それを信奉したところ、靈験あらたかつたという。

(以上、報専坊御住職、松島弘教氏のご指示による。)

(2) 以上の報専坊の由来は、報専坊御住職、松島弘教氏のご指示による。

(3) 『日本歴史地名大系35』 一九八二年五月十三日 株式会社

社平凡社

- (4) 角筆の書き入れは、六個所程度認められた。『行ハ不ル』に「をこ」「巻第一 13丁表2行目」「悪スル」に「ニクミ(スル)」「巻第一 23丁表8行目」などの例が存する。
- (5) 『充』の音は、「ジウ」。ここでは、「ヂウ」になっている。四つ仮名の混乱が、破擦音から摩擦音へ変化したとするならば、この表記はそれと合わないことになる。
- (6) 角筆の書き入れは、九個所程度認められた。『蓬』に「ムクゲ」「上巻 6丁表10行目」、『肩』に「ケン」「上巻 25丁表6行目」などの例が存する。
- (7) この資料の角筆の書き入れには、平仮名と片仮名の混合表記が散見される。このような表記は、同文献に書き入れられた墨の表記と比べた場合、角筆の書き入れに特徴的に現れるものである。角筆の書き入れのほうに、平仮名と片仮名の混合表記が認められる理由としては、角筆の書き入れが他者が読むことを念頭に置かない、私的な書き入れだったという点が考えられる。恐らくは、そのような状況下で、仮名をいずれかに統一することをしないようなことが時々生じたのであろう。
- (8) 角筆の書き入れは、三個所程度認められた。『悲』に「ヒ」「5丁表6行目」、『曙ク』に「スサマシク」「15丁表4行目」などの例が存する。
- (9) 角筆の書き入れは、一個所認められた。『杞』に「キ」「1丁表4行目」の例が存する。
- (10) 角筆の書き入れは、二個所程度認められた。『惴』に「ツ」「5丁表3行目」、『阿ネル』に「ヲモ(ネル)」「9丁裏5行目」などの例が存する。
- (11) 以下の拙稿を参照されたい。
- 拙稿「広島市安楽寺蔵科注妙法蓮華經(角筆文献)について」(広島女学院大学『論集 第四十三集』平成5年)
- 拙稿「広島市比治山町在 法正寺蔵角筆文献について」(広島女学院大学 日本文学 第5号)平成7年
- 拙稿「厳島神社の角筆文献」(広島女学院大学日本文学 第8号 平成10年7月)
- 拙稿「淨円寺(広島県佐伯郡大柿町大君)の角筆文献」(広島女学院大学『論集』第五十集 平成12年)
- (12) 大正新修大藏經所収の本文による。
- (13) 広島女学院大学蔵『楞伽經宗通』(角筆文献)の書誌的事項を簡単に示しておく。
- 江戸時代延宝六年(一六七八) 板、袋綴装、訓点附刻有り、墨書・朱書・白書有り、印有り、縦26・7厘×横17・8厘
- (刊記) 延宝六戊午年九月吉日
- 江戸室町三丁目戸嶋惣兵衛刊

〔追記〕

この度の、角筆文献発掘調査並びに角筆文献の公表にあたっては、報専坊、松島弘教御住職の御厚情を賜った。

記して、心より深謝申し上げます。

また、調査にあたっては、次の学生諸氏の協力を得た。

心より御礼申し上げます。

長尾美紀 山城知子（広島女学院大学学生）

中原慶子（安田女子大学学生）